カナリヤ通信

ICT活用の根幹担う外国人女性

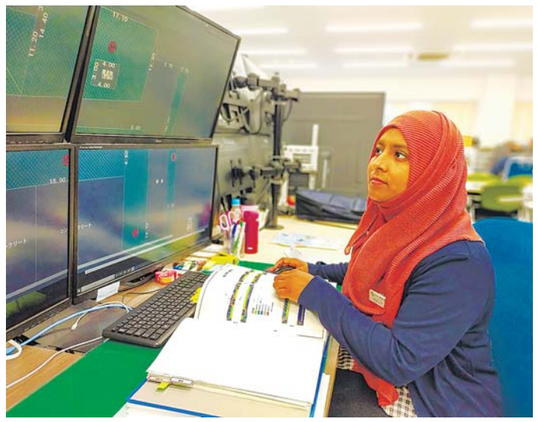
埼玉県春日部市に本社を構え、国や自治体の公共土木工事を中心に事業展開する金杉建設（吉川祐介社長）。国土交通省の第1回i―Construction大賞で優秀賞を獲得するなど、ICT活用のトップランナーとして知られる同社だが、その取り組みの根幹と言える3次元での測量や図面作成に、一人遠い母国を離れて奮闘している外国人女性がいる。

3次元スキル磨き i―Con戦略下支え

いずれは母国の家族も日本に

金杉建設（埼玉県春日部市）

ノオシン・サディアさん



「日本は安全な国で文化度も収入も高い。日本においても、かねてから親戚に言われていました」。バングラデシュ出身のノオシン・サディアさんは、母方の叔父が日本に帰化して事業を営んでいることもあり、子どものころから、いずれ来日することが予定されていたという。

見通しが確約できないビザの関係で、一応現地の大学への進学手続きを終えていたが、2014年4月末に無事ビザが下り、19歳の時に念願の日本へ。到着翌日から日本語学校での授業が始まる慌ただしさだった。

バングラデシュでは、大学卒業までは家族と一緒に暮らすのが一般的で、「親が近くにいないさみしさ、悲しさは相当ありました」と振り返る。日本語学校に2年間通い、その後1年間は社会福祉の大学で研究生として学んだが、高校で専攻し、好きだったCADの仕事に就きたいと一念発起し、「バングラデシュ人も多く、就職率も高いと評判だった」埼玉県越谷市にあるCAD専門学校に転校した。それが現在につながる転機となった。

就職支援にも親身になってくれる学校で、金杉建設は2番目に紹介された会社だった。ちょうど女性限定の求人を出しているところで、仕事内容もCADスキルを生かせる。ベトナムやスリランカなどを含め、10人くらいの外国人女性が就職試験に臨んだ。

「日本語は勉強して半年ほどで話せるようになりましたが、どうしても漢字は苦手。漢字が満足に読めないため、筆記試験は散々な結果で、これはもうダメだと思いました」。ところが翌日、学校に電話があり、サディアさんだけ次の面接試験に進むことが伝えられた。10回以上書き直し、つたないながらも必死に熱意を込めた履歴書の内容なども評価されたようだ。

水中も3次元で測量する

若い人材を育てようという会社の姿勢や女性も働きやすそうな環境、そして話題のi―Conに直接関われる点を含め、「ぜひともこの会社に入りたい」との思いを強くした。しかし、イスラム教徒のサディアさんにとって頭髪を覆う「ヒジャブ」の着用を認めてもらうことは絶対条件。同社にとっても外国人を採用するのは初めて。面接の場では回答は保留されたが、その日のうちに最終の役員面接に来るよう連絡があり、ヒジャブの件も落着した。

これまでは親戚と暮らしていたが、入社を機に、春日部市内に会社が用意する借り上げ寮で一人暮らしをすることに。またもやビザの審査が長引き、同期社員と同じタイミングでの入社がかなわず、引っ越しもなかなかできないなど、やきもきする日々が続いたが、19年4月末に無事入社できた。

土木の世界は専門用語にあふれ、読み方も意味も分からない漢字がたくさん。「伐採や掘削、測量など、初めは何が何だかさっぱり。最初の1年間はひたすら用語を勉強しました」

入社3年目、いまでは同社i―Construction推進室に欠かせない存在に成長した。i―Con戦略の起点となる着工前の3次元測量をメインに、図面作成や施工後の出来形測量なども手掛ける。受注したすべての工事現場を巡りながら、レーザードローンやソナーを搭載した深浅測量ボートなどを操る日々だ。「現場と社内、両方で働くスタイルは自分に合っている。測量の仕事は興味深く、毎日が楽しい」と目を輝かせる。

大型ドローンも操る

積極的な設備投資により、多種多様なi―Conツールを自社保有する同社だが、ほとんどは海外製で、ソフトも基本的に英語表記。5カ国語を話す才女は、ここでも重宝されている。

今後については「土木のことをもっと勉強して理解を深め、より責任を持って仕事ができるようになりたい。いずれは上司のように、マネジメント能力も身につけたい」と前を向く。入社直後自らに課した猛勉強、その後のコロナ禍で帰国できず、3年も母国の家族に会えていない。目の前の仕事に打ち込みつつ、「妹がいま大学3年生。卒業後には、母と一緒に日本に呼びたい」と切に願う。

土木の世界、もっと理解を深めたい

同社i―Con推進室の小俣陽平室長は「初の女性、外国籍、ICTに特化した技術者の彼女が入社して3年目を迎えた。直属の上司として、彼女が最高のパフォーマンスを発揮できる方法を考え、コミュニケーションを重ねてきた。建設業界では外国籍の『技術者』の雇用は進んでいないのが現状ではないか。グローバル化が進む一方、国内での人材確保が難しくなってきている中、建設業者も柔軟に変化・対応できる体制を構築し、より良いものづくりができる環境整備が求められている」と話す。

吉川社長は「これからも性別や国籍を問わず、能力のある人を採用し、適材適所に配置していく。特にICTという新しい分野では、積極的に人材を育てていきたい」との方針を示す。

生産年齢人口が減少する日本、コロナ収束後には外国人材の登用機会はますます増えるだろう。「日本で働く以上、まずは何よりも日本語が一番大事。コミュニケーションを取れないと何もできません。自分から話しかけたり、頼まれごとを受ける際には一言質問を挟むなど、対話が生まれるように心掛けています」とサディアさん。当然ながら、企業側にも本腰を入れたダイバーシティー経営が求められるようになる。

連絡先はこちら
■お問い合わせ　株式会社日刊建設通信新聞社
カナリヤ通信編集部
TEL03―3259―8711
FAX03―3259―8730
■ご意見・ご感想は　canaria@kensetsunews.com までお寄せください。
「カナリヤ通信」は、日刊建設通信新聞社の登録商標です。
webで公開中